大聖院: 弥山本堂

弥山の主要な祈りの場である弥山本堂は、高名な仏僧の空海 (774-835 年) が 806 年に 100 日間かけて過酷な修行に励んだと伝えられている場所に建っています。この出来事は今日、大聖院の開創に相当すると見なされているとともに、「弥山」という地名の由来になったとも考えられています。これは空海が、仏教的世界観で世界の中心とされる須弥山にこの山が似ていることにちなんで、「弥山」と名付けたと伝えられているためです。

弥山本堂内に立っているのが虚空蔵菩薩像 (梵名 アーカーシャガルバ) です。知恵と富に関係する仏で、空海が弥山での滞在中、絶えずこの菩薩の真言を唱えたと言われていました。奥の壁面、虚空蔵菩薩像の両側には 2 つの曼荼羅 (仏教的世界観を描写したもの) が飾られています。左側のものは不変の知恵の領域である「金剛界」を表現する一方、右側のものは物理現象の世界である「胎蔵界」を表現しています。この 2 枚が一体となって両界曼荼羅を作り上げています。これは大聖院の属する真言密教で最も広く用いられている曼荼羅です。

現在の弥山本堂は、台風がかつての本堂を破壊した 1991 年以後に建てられたものです。先代の建物は現在のものよりもはるかに大きなもので、最大 24 名の僧侶が床の上に列を成して座りながら儀式を取り行えるほどの空間を備えていました。第二次世界大戦の前まではそういった活動もここではありふれたことでしたが、戦時中に旧日本軍が監視所として使用するために弥山の山頂を接収した際には中断されました。